花園家のＬＯＶＥ物語

深雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花園家のＬＯＶＥ物語

【Ｎコード】

Ｎ３８４１Ｅ

【作者名】

深雪

【あらすじ】

花園家の長女百合そして襲おうとした優を使いにしている草薙薔薇その秘書村西そして薔薇が狙う百合の父の秘書の雷等が送る宮殿でのＬＯＶＥ物語

ツカツカツカツカ
ん？
「えっと。。。僕は君を襲いに来ました」
んん？
「逃げないでください」
はッ？何こいつ、きもい
えっと、こんにちわァ！！いまピンチです
私は花園百合です。
「ちょッ逃げてもらったら、困ります！！」
「ちょっと、やめろォ（怒」
「怖い目に会いたいんですか？」
「ち・か・よ・る・な！」
ゲシッ
「いった（泣」
「泣き虫ですねぇ」
「君、強いですねぇ」
「貴方が弱いんだと思います」
「ゴメンなさい」
「弱そうだなァと思って」
「あんたのほうがよっぽど弱いと思うわ」
「ごめんなさい」
「いいよ♪ていうか、何しに来たの」
「誰にも言うなよ？あのさ。。。。お前、お嬢様だろ？」
「そうですけど」
「なんかさァ君のとこに雷ってやつおるじゃないですか」
「えッ？私の父の秘書、雷がどうしたの」
「うちの会社のトップが恋したらしいです」

「へぇ」
「だけどトップが雷と付き合ってるって思い込みしてしまって」
「面白いですね、そのご主人様。」
「だから、俺が襲えって（冷汗」
ハァ。。。。だけどさすがにこいつ弱いから無理でしょ
「まぁご主人に言っといてくださりません？私と雷は付き合ってないって」
「うん、それしかいいようがないですし」
「今度紹介して？ご主人を」
「はい、わかりました。」
「あ、主人の名前は？」
「草薪　薔薇様です」
「分かった。私のコトは花園って言っておいて」
「わかりました」
全く、困るわ

「あらァ帰りが早かったのね」
そう、この人がご主人の草薙薔薇様。いつも髪の毛をクルクルにしていらっしゃってスタイルも抜群。顔も綺麗なのだ。（まぁ性格が悪いが）
「いえ、その・・・・彼女は、花園は雷様がお好きでないらしいです」
「あらァなぜ貴方がしっているの？」
「いやァ彼女に負けてしまって。。。。。。」
「貴方、弱いのね」
「すいません」
「あぁ。。。なら謝らなければね！苗字はなんでしたっけ？」
「あ。。えっと、確か花園様でいらしたと思います。」
「花園様ね。そのうち、いえを探し出して御伺いすると言っておいて？」

「分かりました。」
ふぅ、あァ、俺の名前は優。親が俺が赤ん坊の時草薙様の家の前に置いていったそうだ。
それで草薙薔薇様のお父様、朝顔様が見つけて俺を育ててくれた。
「あッちょうどいいところにいた。」
この人は秘書の村西さん、かなりのイケメンで薔薇様とお付き合いしているという噂を聞いたが、雷さんが好きだといっているのでウソだろう
「何ですか？」
「えっと。。。。何処にいらしてたんですか？」
「やァ、特に」
俺はニカッと笑いかけた（苦笑いになっていたかも）
「そ・・・そうですか」
「あ、そうだ。」
「ん？」
「花園百合様の御家って知りませんか？」
「花園様？あぁ！！あの花園様ね」
「？はい。」
「すぐ近所ですよ？」
すぐ近所なのになんで薔薇様は知らないんだ
その後、俺は村西さんに道を教えてもらった

コンコン
「失礼します」
「どうぞ」
「お父さん？」
「何だ、百合かァ？」
「さっきねぇ、草薙様の部下の人がいらして、雷君と私が付き合ってるって勘違いしてね！！！」
「へぇ」

「後で謝りに来るってさァ」
「そうか。でも雷とお前は会わないなァ（笑」
「私は、もうちょっとキッチリしてない人がいいんだもん」
「じゃあ、用意しとくか」
ピーンポーンパーンポーン
『えー、草薙薔薇様がいらしました。ご主人様、百合様に用がある
そうです』
「お父さん、いこう」

ツカツカツカ
「こちらでお持ちくださいませ」
「ありがと」
薔薇様は、ニコッと笑いかけた
「あ、え、いいえ♪」
薔薇様の笑顔は凄く綺麗だ。
だから、誰だってイイ気分になる
「失礼します♪」
サラッ
薔薇様は髪の毛を梳いている。
「あ、優。私お茶が飲みたいの、注いで下さる？」
「はい、わかりました」
コポポポポポポ
「はい、できました。」
「あらァ、貴方は飲まないの？」
「はい。ボクは水でいいんで。」

コンコン
「失礼します」
「はい」
カチャ

「百合様ァ。。。。。先ほどはどうもすいませんでした。」
「俺、いや僕も申し訳ないと思います。」
「いいえ！優さんが弱かったから良かったんです♪
もっと強い力のある方だったら、やられてたかもしれません♪」
「これ、百合！」
「お、おほほほ（苦笑」
あ、まずい私が強いことばれたかも
「それより。。。近所だったのに、何故お互いの事をしらなかったんでしょうか？」
「それもそうですわねぇ！あ、今度お茶しません？」
「そうですね！私も薔薇様とは気が合いそうですし♪」
「あのぉ」
「何？優。」
「僕たちは何ですか」
「あァ。。。すいません、花園様。話題がそれてしまいましたわァ」
薔薇様はニッコリと笑いかけた
「いいえ（苦笑」
「あの、さっきからそちらのお父さんがこっちをじろじろと・・・・」
「いやァ、そちらの優さんは、どこかで見たことのあるお顔をしていらっしゃって
薔薇様の将来の旦那様には見えないので、何処かしら離れていらっしゃっているので」
「あァ、召使みたいなものですよ。優は。」
「あ、思い出した。この方は・・・・お偉い方だ。」
「本当ですのォ？」
「確か・・・・・・瑞希　檸檬様でした。あまりにも変わった名前でしたので」
「どういうお位の方？」
「ていうか、僕、変な名前だ」

「皇帝にいる人だ」
「こ、皇帝！！！！！」
「はい、皇帝です」
「じゃあ、早く皇帝に行かなければ」
「いえ、行きたくないです。」
「何故？貴方は家族に会えるのですわよ？」
「捨てたやつの、世話にはなりたくないです」
「それでも、会えませんよ？家族は死んでいるのです」
「花園様・・・・・何故死んでいるのです？」
「こっそりと、射殺されています」
「誰に？」
「皇帝のトップに」
「えッ！じゃあ、こっそりと暮らしたほうがよさそうですわァ」
「じゃあ、優！いや、檸檬！私と一緒に暮らしましょう？」
「えッ！」
「お父さんは、貴方のこと詳しいでしょ？だから、貴方も私と暮らして？」
「いいんですの？」
「全然♪むしろ楽しそうだし！いいですわよね？」
「全然かまわないが。。。。」
「じゃあ、1ヵ月。檸檬様と暮らしてみてから考えてよろしいですか？」
「はい。」
「じゃあ、また。」

「百合様ってホントに優しいですわァ」
「俺、いや僕にはきつかったですけど」
「そう？今度何処のお茶を飲みに行こうかしら？？」
そうやって、薔薇様は笑顔でお話になった。
コンコン

「はい？」
「村西です。」
「入ってよろしいわよ」
「はい」
「じゃあ、優？下がって」
「はい、失礼しました」
かちゃ
「ごめん、お取り込み中」
「いいえ」
俺はニコッと笑った。
バタン
俺は、右の方向に行ったが左に用事があり左の方向に行こうとしたら
「村西？」
「はい？」
「キスして？」
ちゅ
「愛してるわ」
「僕も・・・・・愛してる」
という会話を聞いてしまった。
何故だ？雷が好きではないのか？？
何をしたかったんだ。。。。。。。。。。薔薇様は。
「あ、優。」
「よ、洋助先輩！！」
「あぁ。。。ちょうど良かった。俺さ、他の用事頼まれているから
買い物、行ってきてくれない？」
「いいですけど。。。用事って？」
「んー、他のやつに内緒だぞ？」
「ハイ」
『女捕まえに行くんだァ』
『え、あ、はい。分かりました。』

「じゃあ、よろしくなァ！」
いいなァ先輩は、背が高くて顔がかっこよくて
良くもてるらしい。
俺なんか、いなかもん顔なやつについていくわけが無い
俺はフフと笑った。

「雷？お父さんがお呼びだよ？」
「はい、分かりました。」
「ねぇ」
「はい？」
「もうその髪型やめたら？変よ？」
「しょうが無いですよ。。。。この髪型がいいとご主人様がいったから。。。」
「まじめすぎ！ご主人様ご主人様ばっかりいって、キモイ！」
「キ、キモイって。お嬢様にしては口が悪いですよ！」
「いいじゃなぁい。人なんだからァ」
「こらァ！うるさいぞ！！」
「「すいません」」
「べー」
「ムッ！！」
ベシッ
「お、お嬢様！！」
「綺麗なお顔が台無しですよ！！でしょ？」
「コラッ！待ちなさい」
「待ちなさいって言われて待つやつはいないよぉん」
「こらこら、百合。あまり雷を怒らせると、怖いぞ」
「お父様ァ。何かァ雷が襲ってくるぅ」
「バッ、お嬢様！！いい加減にしてください！！／／／／／／／／」
「わッ下ネタに反応しすぎ♪顔赤いよォ？」
「お嬢様！！」

「あァそういえば雷、買い物に行ってくれないか？」
「えッあ、ハイ。分かりました。覚えててくださいねぇ」
「覚えたくない><」
あァ、面白かった。
「あァ、百合こっち来なさい」
「説教はほどほどにしてよォ？」
キィ
「あそこに座っておけ」
「何？お父さん」
「多分・・・・・多分だが、雷はお前が好きだ。」
は？お父さん、何言って
「何処が？てか、まぢで？」
「雷を研究していると、周りで下ネタをいっているやつが居ても、無視をするし照れたりもしない。」
「多分、妄想してるのねぇ」
研究って！お父さん、マニアックすぎ（冷汗
「百合のほうはどうなんだ？」
「私？私はただ、あそんでいるだけだよ？」
「ふぅん」
ピーンポーンパーンポーン
『百合様、百合様。優様がお呼びです』
「では、行って来るわァ」
「はい」

がちゃ
「あ、こんにちわ」
「こんにちわァ」
「檸檬様、いってらっしゃい」
薔薇様がニコッと僕に笑った
「い・・・行って来ます。」

「薔薇様？少しお話しません？お暇でしたら」
「そうですわねぇ♪いいですか？檸檬様」
何故か・・・・何故か薔薇様が俺のことを
檸檬様と呼ぶとムネが痛くなった
「はい・・・・・」
「では、どうぞ」
「失礼しますわ」

「優？」
「なんですか？」
「みんなの前では檸檬と呼んで、２人っきりのときは優とよんでいいかしら？」
「はい」
「あァ♪今日は、楽しかったわねぇ」
「そうですね」
「敬語を使わないで♪優」
百合様。。。いや、百合は低い声で優とよんだ。
「うん。。。」
「うん♪」
「しかし、薔薇様が成人していらっしゃったなんて」
「確かにびっくりしたよねぇ♪お父さんと一気飲みしていたもの」
そして百合が美しく見えた
「百合・・・・」
「ん？」
ちゅ
「な、何してんもご・・・・」
「くー」
「む。。。。。は？」
「ＺＺＺＺＺＺＺ」
「寝てるし（笑　さァ、私も寝ようかなァ」

コンコン
「失礼します」
「はい？」
私はすでに起きていた
「起きてた？」
「うん」
「朝ご飯を持ってきたよ。」
「ありがと」
今日は・・・・ベーコン、目玉焼き、サラダ、パン
そして、オレンジのセットだった
「あァ、優はご飯を食べたの？」
「うん俺は。」
「今日は、いい天気ね」
「雲が１つもないなァ」
「今日の予定は？」
「今日は学校があります」
「あら、そう。」
百合は、もくもくと食べ始めた
俺は、予定とか秘書の仕事をしているときは敬語で
それ以外の話はタメグチにしろといわれ、
ためぐちになったりしているのである
「あら、ベーコンがこげてる。貴方が作ったの？」
「はい（苦笑」
「そういえば、昨日の事は覚えてる？」
「あ・・・・うん」
「何故私にキスしたの？」
「百合が美しかったから」
「変な理由ね」
「うん」

「でも・・・貴方は薔薇様が好きなんでしょ？」
「うん、愛してます」
「だけど何「衝動に駆られてしまって」」
何で？私が話をしようとしたのに、急にそんなふうにつめたくいうの？
「貴方は・・・・貴方は私が嫌いなのね？」
「えッ？そ、そうでなくて「いいわ・・・・無理しないで？」」
百合は無理な笑顔で言った
「すいません、すいません」
「いいのよ」
「すみません」
「じゃあ、最後だけ最後だけ・・・・・キスして？」
「はい」
ちゅ

「失礼しますわ。。」
「あ、薔薇様！！」
「わ、私は。。。。。。。」
「すいません、これは何かの思い違いです」
「ごめんなさい、私。せっかく2人が愛し合ってたのにノックなしで／／／／／／／／」
えッ？薔薇様は顔を真っ赤にしている！！？
俺は。。。。やめてといわれたかった。
だけれど・・・やっぱり薔薇様は俺のことを好きではあるものの愛してはいなかった
『薔薇様は・・・貴方の事を愛していないの？おかしいわよ』
『多分・・・僕のことを愛してません』
フッ
泣けてきた。
涙の一粒一粒が綺麗に流れた

「どうしたの？どうしたの？優？」
僕はもう失望してしまった。
「あ、じゃあちょっと出かけてきます。」
「うん、いってらっしゃい？」
がちゃ
「はい」

「うぅ・・・・」
「ん？君、どうしたのかな？」
綺麗な顔が俺を覗いた
「あ、何でも・・・・ぅぅ」
「何か、つらいことでもあったのかな？僕に話せないならしかたがないけどね。聞いてあげるよ？」
「じゃあ」
僕は人の名前は出さずに、話した
「んー、ドラマみたいな話だね」
「はい」
「あ、そうだ。君の名前は？」
「優です」
「僕は、雷。よろしく」
「はい」
「もしかして、初めてココに入ってきた？」
「はい。」
「じゃあ、寮に招待しなければね」
「えッ泊れるんですか？ココで働くと」
「宿泊代は無し。ご飯とかもタダだよ」
「すごいですね」
「うん」

んー、優ったら何処にいったんだろ？

「遅い遅い」
「どうなさったんですか？お嬢様」
「ううん、優が遅いの」
「あァ、それなら雷さんと一緒に公園で話してらしましたよ」
「えッ・・・・あらそう」
「何か楽しそうに話していました、あの2人かっこいいですよねぇ」
「うん」
「なんか、2人のファンとかいるらしいですよォ」
「へぇ」
全然興味の無いような、言い方をしているけれど
すごく、気になる
ファンとか・・・・・・・
「まぁ、お嬢様たちにとってはあまり、関係の無いかもしれませんねぇ」
「そうかもね」

「あァ！すっきりしました」
「そっか、よかった」
ニカっとわらった
「えっと・・・・」
「何？」
「さっきから、女性の目線が・・・・・・」
「ホントだね」
僕らが、その集団を見たとき
「「「「「キャーーーーーー」」」」」
「今、私をみたわよぉ！！！」
「私よぉ！！！！」
何か、言い争っている
「なんだろね」
「さァ？」

「何？あの声。」
ざッ
カーテンを開けた
「あ！！優と・・・雷？」
「あら、囲まれてますねぇ大丈夫かしら？」
「助けに、行くわ」
タッタッタッタッタッタ
「お嬢様ァ、危ないですよォ」
「大丈夫ぅ、心配しないでぇ」
「ハァ、お嬢様ってホントに彼がすきなんですねぇ」

「ハァハァ」
ダンッーーーー
「すいません、マイク貸してくださらない？」
満面の笑みで笑顔を作った
「は、はい」
ピーンポーンパーンポーーーーン
「そこの、集団ッ！！」
シーーーーン
「今から、掃除ですわよッ！！！！」
『教官だわ』
教官といって、召使のなかで一番偉い人がいて
その人の物真似を私がしたんですw
「早く、戻りなさい！！１０秒で！！！！！！」
「ざわざわ」
さぁ行かないと
タタタタタタタタ

『あの、今の声。誰ですか？教官って言ってましたけど』

『ん？召使のなかで偉い人なんだけどね。
でも、あの人じゃないよ？』
『どういう意味ですか・・・・』
『んー、いわいるお嬢様かな？』
『お嬢様ってまさか・・・・』
『もちろん、百合お嬢様だよ？多分集団を消そうとしたんだね？』
「優ーッ！雷ーッ！！」
「お嬢様！！」
「何ィ？」
「何してるんですか！教官にしかられますよ！！」
「いいぢゃん、助けたんだしぃ」
「ほんとに・・・・いっつも心配かけて」
「別に、心配かけなくていいよ？」
「はぁ？！！」
「だって、実際お父さんの秘書なんだしね」
『百合、それをいっちゃ』
『ん？』
「んーーー／／／」
「ゴメン、ゴメン（汗」
「た、確かに、僕はご主人様の秘書です。
しかし・・・・なんというか・・・・・・」
「何？」
「あ、貴方のこここことがすすすすす・・・」
「キモイよ」
「好きだからです！！」
「はッ！？？」
「言っちゃった。。。。。。」
「馬鹿じゃないの！！声でかすぎ！！／／／／」
「ちょッ、返事は！！いつでもいいですから！」
「うーーーッッ／／」

だーーーーーーッ
「いっちゃったんですけど、いいんですか？」
「えッ？えぇ、あ～大丈夫だと思います。」
「今の気分は？」
「あそこまで嫌われるとは、思えなかったです」
「嫌っては無いと思いますけど・・・・・・」
「そっちこそ、お嬢様がすきなんでしょ？」
「ばッ！！真正面から言わないでくれません？」
「さぁ、どっちが勝つだろうねぇ」

「何だよ何だよ何だよ、いきなりさァ／／／」
「それはちょっといきなりすぎかもね」
この人はあの、薔薇様
「っていうか、このお菓子すごくおいしいですわ」
「もぅ、薔薇様ったら私の前でですわ使わないでぇ
友だちなのに敬語とかめんどいし」
「そうね、じゃあ百合。このお菓子うまいッ！！」
「フフフッ」
「雷ってそんなに、積極的だったんだ。」
「以外だよねぇ」
「でも、ちょっとそんなふうな雷がかっこよかったりして」
「え～、微妙w」
「で、どっち選ぶの？百合が選ばないほうをもらうわ♪」
「えぇ。。。。。やっぱり檸檬カナ？」
「はい、断ってきなさい！」
「えッちょっとまってよ、私そんなすぐに「何いってんの！」」
「檸檬様だって貴方の気持ちをまってるのよ？」
「そうね、そうよ！私はぐじゅぐじゅしてられないわ！
行ってくるね」
「うん」

「雷！いた！」
「あッ、お嬢様。」
「ごめんね、逃げ出して」
「いいえ、びっくりなさったでしょう」
「それと、ごめん・・・・私やっぱり「優様が好きなんでしょう？」
」
「えっ？」
「だって、優様からご相談させられてたんです」
「あの、馬鹿。」
「ふふッ面白いかたですね、さぁ告ってきてください。」
「ありがと、ありがとう。雷、大好き」
「早く行ってください！！」
あぁ、俺。負けたァ！
やっぱり、恋というものは実らない物なのか・・・・

「好き、あの告白断ったの」
「えっ！」
「フフッいいでしょ？優。」
「え・・・・・無理」
「そっかwじゃあ、ごめんね」
「違う、そういういみじゃなくて」
「えっ？」
「この場で抱きしめたくて無理。死にそう」
「じゃあ・・・・・抱きしめて？」
「うん」
キュッ
「痛いッ！（怒」
「ごめん」

||||||END||||||

（後書き）

「あぁ～良かった」
「何が？」
「え？断ったら貴方の家を潰そうかなとか思ってね」
「ま、まじ！良かったァ・・・・てか冗談じゃない！！！！！」
「フフッ大好き」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3841e/

花園家のＬＯＶＥ物語

2011年10月4日20時18分発行